能　楽　ノ　ー　ト

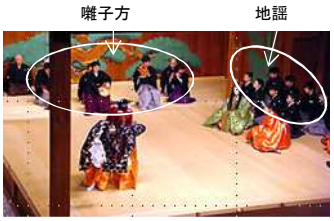
平成29年秋　松戸謡曲連盟

能楽とは

能楽は、現代風に言うと、ミュージカルやオペラに相当する演劇です。セリフと謡により進行し、楽器が舞台を盛り上げます。
成立時、仮設舞台での短期興行だった為、背景やリアルな大道具を使わない演出となっています。地方巡業が多かったのも、大道具を使わない事情です。
抑制→解放と言うドラマの普遍的構成の中で独特の緊迫感を楽しむ演劇です。尚、現行曲は約200です。
武家の式楽とされた影響で、庶民から縁遠い印象を持たれますが、先入観のない外国人が公演を楽しんでいますので、初見の方も十分楽しめる演劇です。

能と狂言

最近は時間の関係で殆どありませんが、正式の演能では、能を5番その合間に狂言を各1番演じます。能は緊迫した舞台を楽しむ為、見者も長時間緊張が強いられます。この為、能の幕間にコメディーをはさみ緊張を和らげる仕組みになっています。又、5番立の演能は、順番も曲趣別に決まっています。
それぞれの舞台表現の特徴は、能は抑制、狂言はデフォルメと言えます。
狂言はセリフ劇で、原則、能のように囃子やバックコーラスがつくことはありません。



能

狂言

能のテーマ

神威譚や仇討、アクションを見せ場とした曲（能では、演劇の単位を「曲」と言います）もありますが、多くの曲は「愛別離苦」や「生業故の罪への苦悩」等が主題となっています。
「愛別離苦」：｛愛｝とは執着。恋しい人・可愛い子供等と心ならずも引き裂かれる苦しさ悲しさを意味します。愛が深ければ深い程、その苦しみは増してきます。取り上げる愛（執着）の対象は恋人、夫婦、子供、容姿、若さ、名声は無論の事、楽器等　人が愛着を持つもの全般におよびます。
「生」の不条理と苦悩。移ろい行く物への限りなき慨歎、現代演劇と重なるテーマが多いのです。
大きく分類すると、演能順に、1番目（神）2番目（武将）3番目（女性）4番目（狂気、執心他）5番目（鬼神）と別れ、一般に「神・男・女・狂・鬼」と称されます。

能の音楽

謡の発声法は、「柔（よわ）吟」「剛（つよ）吟」の2種類があり、各々8音階、5音階で作譜されます。また、リズムは「8拍」を基本とします。五七調の詞章12文字を8拍に割り付けるのが基本になっています。（現代風に言えば、8拍子8音階、又は16ビート8スケールという事になります）
楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種があります。笛は主に舞の旋律を担当し、小鼓他打楽器は舞並びに謡のリズムを担当します。8拍の前半を大鼓が、後半を小鼓が主に担当します。太鼓は曲趣により入らない事があり、1番目・5番目は必ず入り、2番目・4番目は原則入りません。3番目は半数位に入ります。楽器を打つだけでなく、独特の掛け声をかけるのも特徴です。

能面

面は「おもて」と読みます。演劇とは、「演じる」ことですから、ストーリー内の人物になりきる（変身）必要があります。この変身の為に使うのが「面」です。
主人公の役柄により使い分け、さらには同じ曲でも解釈によって表現の違う「面」を使う為、現在250種類程の能面が使われています。
「敦盛」を例にとると、成人貴族「中将」、貴公子「今若」、けなげな少年武将「敦盛」、幼さの残る「童子」等、演者の解釈により違った面を使います。演者（シテ）は当日の演出を決め、どの「面」を使うかを決めます。それを受け各パートも謡い方・舞方・囃子を変える事になります。
若い女性の「面」も、無垢なあどけなさの「（花の）小面」、理知的で気品のある「若女」、匂うような色香の「万眉」等多数があり、同じ曲でも舞台表現が異なってきます。

「敦盛」で使う面
左から
中将・今若
敦盛・童子

若い女性
左から
花の小面
雪の小面
（雪月花の内、月は行方不明）
若女・万眉

能の流派

能シテ方には、「**観世流**」「**宝生流**」「**喜多流**」「**金春流**」「**金剛流**」の五流派があります。（ワキ、囃子、狂言にも各々複数の流派があります）
・流派は、元々「観世座」等と呼ばれる、演劇集団をさす呼称から出ています。この演劇集団の座元を「太夫」と呼んでおり、江戸時代「猿楽」各座の太夫を幕臣とし、各藩の猿楽師の支配権を与えたことにより、五流が定着する事になりました。演劇集団ですから、各集団毎に演出法・曲の解釈が若干異なりこれが流派の差を生んでいます。
＊13・14世紀、貨幣経済発展で、庶民向けの娯楽興行が成り立つようになり各地に興行団体が林立します。大和猿楽「結崎座」の**観阿弥**は当時の各演劇集団の流行をテンコ盛りにした演出で、絶大な人気を博します。王朝文化とは別の価値観を持つ「武家文化」創造を模索していた足利義満は、観阿弥の子**世阿弥**に関白二条良基等を家庭教師としてつけ、見巧者をも満足させる物へと「猿楽」をブラッシュアップさせます。ここに現在につながる猿楽（能楽）が完成します。
＊猿楽座も多数ありましたが、大和猿楽として結崎座（＝観世座）と演者の相互交流のあった「大和猿楽」四座が猿楽の主流を占めるようになります。江戸時代四座の太夫が幕府のお抱えとなるに及んで四座以外は事実上消滅します。尚、徳川秀忠の時代に金剛流からスピンアウトする形で「喜多流」が認可され現在の五流体制が確立しました。
＊明治維新により、パトロンを失った「猿楽」は途絶えそうになりますが、諸人の努力により、再び「能楽」として流行するようになります。「能楽」という言葉は、明治時代の造語です。

本日の番組の演じ方

素謡・連吟・独吟

能の台本を、役割を割り振って、囃子や舞を伴わず演じるのが**素謡**です。主役：シテ、脇役：ワキ、バックコーラス（地　と言います）。地の謡は地頭（じがしら：番組太字の人）がコンサートマスターで、シテの演出意図を受け地謡をリードします。　★尚、一部分を複数で謡うのを**連吟**、一人で謡うのを**独吟**と言います。

舞囃子

能のクライマックスの部分を、笛、小鼓、大鼓、（太鼓）に合わせ、舞・謡います。本日の2曲の舞囃子は、いずれも「中之舞」と言う舞が中心になります。

仕舞

能の一部を、装束をつけずに、舞います。バックは地謡だけで囃子は入りません。

居囃子・連調

曲の一部を、囃子と謡で演じます。舞は入りません。複数の楽器が入るのが、**居囃子**、同一の楽器が複数入るのが**連調**です。本日は、小鼓が複数の為「小鼓連調」となります。

《　一緒に楽しみませんか　》

H. 30年2月「始めての方の為の謡曲講座」を松戸市自主講座として開催予定です

お問い合わせは、「矢切舟謡会」代表　柴田光幸まで。（Tel：047-387-3483）

既に習っておられる方は、本日の番組表最終頁をご覧の上、各会代表者にご連絡下さい
Http://chibakennoren.jimdo.Com参照

本　日　の　演　目

・曲柄は、「能楽全書」に準拠　・場所はテーマの主となる地

平成29年度「秋の謡と仕舞の会」 松戸謡曲連盟

曲目　50音順	主人公・曲柄	季節・場所	内　　容
敦盛 あつもり	平敦盛亡霊 **公達物**	**初秋** **神戸・須磨**	一ノ谷の合戦で、我が子と同年の若武者を討ち取った　熊谷直実はその後悔の念で出家し、平敦盛供養の為、古戦場へと向かいます。そこで地元の草刈り(實は敦盛亡霊)と出会い物語する内に正体を知ります。その夜、夢中に在りし日の敦盛が現れ、往時の事を語ります。戦物語ではありますが、少年武将の初々しさ、けなげさ、望郷の想いがそのテーマになっています。能の定型「前半・主人公の魂魄が現身となった人物がゆかりを語り、後半・主人公の亡霊が現れる。」**複式夢幻能**です。
善知鳥観世宝生 **烏頭**喜多 うとう	猟師の亡霊 **執心物**	**初夏** **青森外の浜**	妻子を残して死んだ猟師の愛別の哀しさと、生きて行く為に殺生を重ねなければならない罪業への後悔をテーマとした曲です。***何しに殺しけん。我が子のいとほしき如くにこそ、鳥獣も思うらめ。***と幽霊になり妻子に近づこうとしても罪障の為幻につつまれ近づけません。さらには、猟で雛を捕る場面から、親鳥の悲しむ様を見せ、その罪業故に地獄で無間の責苦を受け、***助けてたべ***といいながら舞台は終わります。
小督 こごう	源仲國 **侍物**	**中秋** **京・嵯峨野**	平清盛を忖度し身を隠した、高倉天皇の愛妾「小督の局」を天皇の命により捜しだす物語。中秋の名月、茫々とした秋の原、嫋嫋たる琴の音、武者の騎乗姿、清らかな詫び住まい。美しく爽やかな曲です。
兼平 かねひら	今井兼平 亡霊 **勇士物**	**初夏** **大津・粟津**	木曽義仲の家来「今井兼平」の死を決した壮絶な最期の物語です。僧に弔って欲しいとはいいますが、語るうちに自分よりまず義仲の菩提をと願い、自身の討死の様を現じ消えていきます。**自害の手本よとて・・・兼平が最期の仕儀、目を驚かす有様**
加茂宝生喜多 **賀茂**観世 かも	前御祖の神 後　別雷神 **荒神物**	**夏** **京・賀茂社**	賀茂神社の縁起譚です。前半は下賀茂(賀茂御祖神社)後半は上賀茂(賀茂別雷神社)が舞台で、別雷神が雄壮な舞を披露します。
草子洗小町観世 **草子洗**宝生 **草紙洗小町**喜多 そうしあらいこまち	小野小町 **現在鬘物**	**初夏** **京・内裏**	宮中の歌会で、小野小町が、発表した歌が古歌であるとのワナにはめられ、証拠のページを洗う事により疑いを晴らすと言う物語です。疑惑をかけられる緊迫感と、その後の晴れやかな舞台が見せ場になっています。 小野小町、大伴黒主、紀貫之と六歌仙が登場する物語です。
経正 つねまさ	平経正亡霊 **公達物**	**秋** **京・仁和寺**	琵琶の名手、平経正の愛器を供え、法要をしている場に経正の亡霊が現れ、風流三昧の昔を偲びます。愛器「青山」での演奏の有様を再現する内に帰る時となり、修羅の様を演じます。修羅物ではありますが、風流への執着をテーマとした演目です。経正は、敦盛の長兄であり討死時の実年齢は30歳前後ですが、能では若武者として表現します。
天鼓 てんこ	前天鼓の父 後天鼓亡霊 **唐物**	**秋** **中国・洛陽**	中国・後漢の時代、鼓の申し子「天鼓」が皇帝の命に逆らい愛器と共に逃亡。本人は川に沈められ、鼓は没収されます。その鼓が鳴らぬ為、父が呼ばれ、子を偲び嘆きながら鼓を打つと奇跡的に音が出ます。後半は天鼓の亡霊が現れ秋の夜に鼓を打ち戯れます。前半の子を想う親の情と、後半の軽快な舞踊が対照的な構成になっています。
東北 とうぼく	和泉式部 亡霊 **本鬘物**	**初春** **京・東北院**	和泉式部が愛した梅の木の木陰で式部を供養していると、亡霊が現れ、歌の功徳で菩薩となった事を告げ、在りし昔を偲びつつ舞謡い元の自分の書斎へと帰る所で夢が覚めます。
巴 ともえ	巴亡霊 **女武者物**	**初春** **大津・粟津**	木曽義仲の愛人、女武者「巴」が義仲最期の場にあたり、義仲と共に自害を望むも叶わず、義仲自害の時間を稼ぐ為に奮戦し、義仲の遺品を携え木曽へと帰る物語です。義仲と共にする悲惨な逃避行、雄壮な巴の奮戦、義仲遺骸との悲痛な対面、遺品を守っての哀しい帰郷と起伏に富む構成になっています。
野宮 ののみや	六条御息所 亡霊 **本鬘物**	**秋** **京・嵯峨野**	「野宮」は、斎宮(伊勢神宮の祭主)となる皇女の赴任前住居。草深い嵯峨野にあります。 野宮を訪れた僧の前に、元皇太子妃「六条御息所」の亡霊が現れます。御息所は、皇太子の死後、光源氏と愛を交わしますが、光源氏の足が遠のき、押さえきれぬ嫉妬に苦しみ、娘と共に伊勢へ行く事にした胸中を語ります。華やかな生活から一転ないがしろな扱いを受ける無念さ、はしたないと思いながらも押さえられぬ嫉妬。別れに訪れた光源氏との瞬間の邂逅。そして諦念。秋の情景の中で閑に語られる、女性の「さが」が美しくも哀れな、能を代表する名作です。
野守 のもり	鬼神 **鬼物**	**初春** **奈良・春日野**	奈良・春日野で、由ありげな水たまりを見つけた山伏が、野守の老人と話しをする内、水たまりは「野守の鏡」老人はここに住む鬼神と明かされます。後半は、正邪を写す「浄玻璃の鏡」を持った鬼神が登場し雄壮な舞を披露します。
半蔀 はじとみ	夕顔亡霊 **本鬘物**	**秋** **京・五条辺**	光源氏とその市井の愛人「夕顔」との邂逅と、死別の物語を情緒豊かに表現した作品です。能舞台の夕顔(瓢箪)のからまった作り物から夕顔の亡霊が出現する場面が印象的なしっとりとした名曲です。
橋弁慶 はしべんけい	弁慶 **切合物**	**秋** **京・五条橋**	弁慶と牛若丸が五条大橋で決闘し、主従の契りを交わす物語です。
雲雀山 ひばりやま	中将姫の 乳母 **狂女物**	**秋** **奈良・宇陀市**	讒言により、主人から中将姫を殺すように言いつけられた乳母は、密かに中将姫と隠れ棲み、野の花を売って暮らしています。父右大臣は、讒言と知り供を連れ娘を探しています。乳母は面白い売り言葉で花を売り、後、大臣の供に現在の境遇を話します。大臣は、探していた姫の乳母と知り姫の行方を尋ねます。乳母は容易に姫の赦免を信じません。虚々実々のやりとりの後めでたく姫は帰る事になります。　　中将姫伝説を素材とした曲「當麻」の前段ともいうべき曲です。
船弁慶 ふなべんけい	前静御前 後平知盛亡霊 **猛将物**	**初冬** **尼崎**	兄頼朝との政争に敗れた義経は、西国での再起の為、尼崎・大物の浦より船出しようとしています。 **前**：静御前の同行を知った弁慶が義経・静を説得し静は泣く泣く同行をあきらめます。 **後**：船出した義経一行を、平家の猛将平知盛の怨霊が襲い船を沈めようとしますが、弁慶の活躍で撃退します。
巻絹 まきぎぬ	熊野の巫女 **特殊物**	**冬** **熊野本宮**	三熊野に奉納する巻絹を持った下人が、指定時間に遅れます。それは、途中熊野本宮の末社に参詣した為でした。遅参をとがめられた下人の無実を、神が憑依した熊野の巫女が晴らします。憑依の様の面白さを見せる曲になっています。
三井寺 みいでら	行方不明 の子の母 **狂女物**	**秋** **三井寺**	**前**：子供が行方不明になった、駿河国の母親が子を探し、京の清水で三井寺へ行くようお告げを得ます。 **後**：三井寺で、故郷を想い鐘をつきます、咎める僧とのやり取りの中で子を見つけ、相伴って駿河へ帰ります。 唐詩「楓橋夜泊」に想を得、琵琶湖を「太湖」に、三井寺を「寒山寺」に見立てると共に、鐘にまつわる様々な故事を引きながら月夜を愛でる詩情豊かな曲になっています。
通盛 みちもり	平通盛亡霊 **公達物**	**夏** **阿波・鳴門**	妻に心を残しながら討死した武将と、夫の討死を知り乳母の制止を振り切り後を追い入水した妻の物語です。 **前**：僧の前に夫婦の乗った小舟が現れ、夫の戦死を知った通盛の妻が入水自殺した有様を説明します。 **後**：通盛の亡霊が現れ、妻の行く末を気に掛けながら一ノ谷から出陣する様子と相打ちで戦死する様を演じます。修羅・執心の能にめづらしく最後は僧の供養で成仏して終わります。(多くは「跡弔いて賜び給え」と供養を依頼して終わります)
紅葉狩 もみじがり	鬼神 **鬼退治物**	**秋** **信州・戸隠**	平維茂の鬼退治物語です。 上臈に姿を変え、宴会する一団に山中で遭遇した平維茂は、一時鬼にたぶらかされますが、正体を現した鬼神を退治します。
屋島観世 **八島**宝生喜多 やしま	源義経亡霊 **勇士物**	**春** **讃岐・屋島**	源義経の勇姿を、「弓流し」「鍬引き」等屋島の合戦でのエピソードを中心に演じます。間狂言(前半と後半をつなぐ狂言方の説明)で那須与一の「扇の的」を語る事もあります。最後は源平の最終戦「壇之浦の戦い」を再現し、それも昔語り、今は平凡な浦の気色が広がるのみと終わります。